
第 109 回関西スペイン語教授法ワークショップ(TADESKA) 開催の報告

CIX Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai

日時：2017 年 7 月 1 日（土）10:00 - 12:00

場所：茨木市福祉文化会館 201 号室

担当者：横山友里

TBLT (Task-Based Language Teaching タスク・ベースの言語指導)で行う『スペイン語学習のめやす』を利用した教案の作成

テーマ 11：家（『スペイン語学習のめやす』 pp.60-61, pp.125-126）

* Fecha y hora: sábado, 1 de julio de 2017, de 10:00 a 12:00

* Lugar: Ibaraki-shi Fukushi Bunka Center, Sala 201

* Encargada: Yuri Yokoyama

* Elaboración de unidades didácticas a través del enfoque por tareas (TBLT)

Tema 11: La casa (“Un modelo de contenidos” : pp.60-61, pp.125-126)

ワークショップの流れ

まず初めに、めやすと TBLT についての発表を行った（内容の詳細については別ファイルを参照）。発表の主な論点は、①テーマ 11 のめやすの確認、②TBLT とは何か、③めやすと TBLT の類似点と親和性、④TBLT への認識転換、⑤TBLT による授業詳細、授業例である。

その後、実際に報告者が準備をしたタスクを使って、TBLT で授業を行った。そして最後に質疑応答の時間を設けた後、本ワークショップで扱った TBLT のタスクの分類を行った。

発表の内容

別ファイル参照

議論

当日行った質疑応答・議論の主な点を以下にあげる。時間の関係であまり詳しくできなかった質疑応答・議論については、今回の報告で加筆した。

・授業でどのようにタスク活動を行うのか。対象レベルは？

→シラバスがほとんど文法シラバスに基づいたものである現状に合わせ、ハイブリッド型（松村, 2012）のタスク活動が日本の教育現状に適していると思われる。ハイブリッド型とは、文法中心に教える期間の後に TBLT 中心の期間を設けるという形で従来型の授業と TBLT を両方行うものである。

対象レベルは、本ワークショップではスペイン語教員を対象としたため、初心者向けではないタスクを用意（専門科目としてスペイン語を学習する程度）したが、全くの初心者にも TBLT で教えることも可能であり、教員の工夫次第でレベルは調節可能である。

・文法を直接教えるのと比べて時間がかかりすぎるのでは？

→どこに目標点を設置するのかという問題と関係がある。文法を教え、ネイティブの使用するスペイン語を正解として正しいスペイン語を理解することを目標とするよりは、「授業外でも機能する英語使用者」（松村, 2017）（スペイン語の場合はスペイン語使用者）を育成するという目標に向けて言語教育を行うのならば、TBLT の方がスペイン語使用者を育成する面では時間はかからないはずである。

・評価はどのように行うのか？

→TBLT は、正しい言語形式を使えたかということではなく、課題（タスク）を達成できたかという点にゴールがおかれる。よって唯一の正解を求めて授業が行われるわけではないため、学生一人ひとりの個人差や多様性を考慮して評価を行う必要がある。具体的には、ポートフォリオや Can Do 評価、ル

ーブリックの活用などが考えられる。

・文法を体系的に学習することができないのでは？

→第二言語習得研究分野の知見、つまり言語習得理論や認知の創発性、言語処理・発達の性質などを参考にすると、学習者は、教えられた通りに言語を習得していくのではない。具体的には、多次元モデル (multidimensional model) や処理可能性理論 (Processability Theory) を提唱した Pienemann (1998, 2005a, 2005b, 2006) が述べているように、言語知識の発達や習得は学習者それぞれの発達段階に応じた処理可能段階の知識でしか生じ得ない。また学習者は、個人個人の過去の言語学習経験や自律的な学習経験などの影響から、言語習得上の気づき (noticing) が生じる場面には個人差がある。この特性を鑑みると、Long (1981,1983,1996 など) が提唱した相互作用仮説に基づき、学習言語でコミュニケーションを行なった際の齟齬を修正、訂正するための一連の意味交渉などによって言語習得を行う TBLT は、個々人の言語発達段階に応じた体系的な言語学習であるといえるであろう。

・プレタスク次第である

→当日は時間の制約、また教員対象に行っているという点でプレタスクを省略して行ったが、実際には、プレタスクの段階では、タスクの内容に関するスキーマを高める、必要最低限のボキャブラリーを導入するということが考えられる。

・目的を持って行えるので、やらされている感がなくてよかった

→TBLT の目的が、現実的に機能する第二言語使用者を育てる、真に自由で自発的な言語使用の場を学習者に提供、学習者自らが積極的に情報を整理、統合、分析するなどして主体的な判断を行う機会を授業の中に作り出していくこと (松村, 2017) という点にあるため、学習者自身が課題 (タスク) を実行するために言語活動を主体的に行うことが必要かつ重要になる。

Long, M.H. (1981) Input, Interaction and second language acquisition. *Annals of New York Academy of Sciences*, 379, 259-278.

Long, M.H. (1983) Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistics*, 4,126-141.

Long, M. H. (1996) The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. Ritchie & T. Bhatia (Eds.), *Handbook of second language acquisition*(pp.413-468). San Diego, CA: Academic Press.

松村昌紀(2012).『タスクを活用した英語授業のデザイン』東京:大修館書店.

松村昌紀編(2017).『タスク・ベースの英語指導-TBLT の理解と実践』東京:大修館書店.

Pienemann, M. (1998) *Language processing and second language development: Process-ability theory*. Amsterdam: John Benjamins.

Pienemann, M. (2005a) An introduction to Processability Theory. In M. Pienemann (Ed.), *Cross-linguistic aspects of Processability Theory* (pp.1-61). Amsterdam: John Benjamins.

Pienemann, M. (2005b) Discussing PT. In M. Pienemann(Ed.), *Cross-linguistic aspects of Processability Theory*(pp.61-83). Amsterdam; John Benjamins.

Pienemann, M. (2006). Processability Theory. In B. VanPatten, & J. Williams(Eds.), *Theories in second language acquisition: An introduction*(pp.137-154). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.